ふしぎなフーセンガム

エメラルド色のフーセンガム

2年　Y・Sさん

「なんで女なのにみどりの絵のぐばっかりえらぶの？へんなの」

絵のぐ作りのたいけんに行ったとき、となりのせきの男の子にそう言われた。わたしは何も言いかえせなかった。女なのにへんだと言われたことにも、はんろんできなかった自分にももやもやした。それからしばらく、みどり色のおり紙をえらぶことがへった。

わたしはこの本を読んで、じゅんをおうえんしたくなった。むかしのわたしと同じだったからだ。じゅんは男のくせにと言われている。そう言われると自分にじしんがもてなくなると思う。わたしもそうだった。でもわたしはしばらくして、はくぶつかんでエメラルドを見た。「五月のたん生石はエメラルドよ」とお母さんが教えてくれた。長い時間をかけて自ぜんに生まれたエメラルドのみどり色はきらきらかがやいて見えて、わたしにもう一ど自しんをくれた。みどり色をすきなそのままの自分でいいとゆうきがわいた。

だから、ふしぎなフーセンガムにねがって女の子になったじゅんが、自分は自分だと気がついたところで、わたしのむねもあつくなって、じゅんと一しょに強くなれた気がした。なりたかった女の子になったからといって、みんなが自分を見つけられるわけではないと思う。人によっては「またもどれたらいいのに」と後ろむきになってしまうかもしれない。でもじゅんはちがった。じゅんは自分の気もちに正直なやまんばみこをかっこいいと言っていたけれど、じゅんもさい後にはそんなかっこよさをみにつけたと思う。だからわたしは「そうだよ！じゅんはじゅんだよ！」とおうえんしたい気もちでいっぱいになった。

自分の気もちに正直に生きることはかっこいいと、この本を読んでやはり思う。これからも自分の「すき」に正直でいたいし、「その人らしさ」をうけ入れられる自分でいたい。